

千年王国と否定の論理

イギリス革命におけるアナキズム運動の原初形態
田村秀夫

「千年王国の思想は、中世を通じて流れる民衆的思潮の、唯一のそしてまた最も極端な現われである」(コーン)といわれているが、二〇世紀になっても、スペインの村落的アナキズムには千年王国思想が色濃くにじみ出ているといわれる。千年王国論の世界が「煽動と挑発」との世界であり、そこでは人間の魂はその深層を外に表わそうとしていた」と主張するマンハイムは、アナキズムが「千年王国論的な意識の真正正銘の形を一遍純粹に保っている」と述べている。ふつう「ビュリータン革命」と呼ばれるように、宗教的な外被をまとうて遂行された十七世紀のイギリス市民革命において、千年王国の思想はとりわけ重要な意味をもち、宗教的なセクトの民衆運動のなかに噴出したアナキズムは、この千年王国思想と結合して展開する。われわれはそこに、近代のアナキズムの原初形態を見出すことができるであろう。

I 革命思想としての千年王国思想

この世の終末が近づきつつあり、キリストが現われて聖徒とともに千年王国の統治をはじめようとしているという教えは、いわば「キリスト教とともに古い」ものであるが、社会的危機の時代に、そのキリストの王国がこの地上のものであり、その実現を促進することを義務と感ずるひとびとが出現した瞬間から、千年王国の教えは社会革命と同義語になるのである。バビロン、ペルシヤ、ギリシャの三王国の崩壊に続いてローマ法王の権力の支配する第四王国が終末に近づきつつあり、主権者イエスの統治する第五王国が間もなくはじまるという考えは、不安で革命的なアジテーションに満ちた時代に、すさまじい、ほとんどはかりしれない影響力を及ぼしたものと思われる。

●千年王国の教えは社会革命と同義語になる

革命前のイングランドにも千年王国思想は存在したが、革命の勃発とともに、出版検閲制度の事実上の崩壊に伴って、千年王国主義の著作が急速に増加することになる。その代表的なものとして、たとえば、ジョン・アーチャーの『キリストの地上支配』(一六四一年)は、国王の権力にたいする批判を明示して、「すべての君主は次第に専制と抑圧に陥り、彼らの臣民を奴隷化してゆくであろう」と述べたのち、「キリストはすべての国王の権力を飲みくだす目的をもっている。……全世界が国王たちの専制と抑圧のもとで苦しんでいるとき、彼はすべての王冠を打倒しにやってくるであろう」と指摘している。このように国王攻撃と結合した千年王国思想を表明した著作の多かったことは、革命当時の出版物を蒐集した大英博物館のトマス・コレクション所蔵の一六四〇年から五三年までに出版された新刊書を点検したところ、この期間中に三点以上を出版した議会派聖職者一十二名のうち七〇パーセントに当たる七八名に千年王国思想が確認されていることから想像できよう。したがって、千年王国思想は、「長期」「革命」議会における公式説教のもっとも注目すべき、また基本的な特質」(ウィルソン)であったと主張されても、驚くにはあたらない。

しかも、これらの説教は、しばしば、きわめて戦闘的な調子を含んでおり、たとえば、ステイヴン・マーシャルの「一六四一年二月二三日における下院の説教は、つぎのように訴えている。「このこと『流血』をさし控えた、欺瞞的に、つまり……ある者を殺してある者は救う

というように行なう者は、のろわれた人間である。神の教会の敵であるモアブにたいしてこのことが行なわれるべきときに、もしもその仕事を完遂しない者は、のろわれた人間である。彼らの活躍にたいして、ある国王派の著者は、「説教壇が太鼓のようにとどろき渡り、説教者は大砲のように火を吐いた」と語っている。

●千年王国と革命と神の大義との融合

こうして、千年王国と戦争・革命と神の大義とが融合されてゆくが、そのさい、トマス・グドウィンがつぎのように民衆に呼びかけるとき、彼らは人神の教会の敵Vないし人キリストの敵Vと闘う強力な戦力として期待されていた。「神は、主なる全能の神の統治を宣言するために、庶民や大衆を用いたまう。キリストが現われたとき、まず最初に貧しいひとびと——多くの賢いひとびとや、貴頭のひとびとや富裕なひとびとではなくて、貧しいひとびと——が福音を受けたように、宗教改革においては、キリストの敵が発見されはじめてからのち、まずキリストを求めるようになったのは庶民であった」。

●ステイヴン・マーシャル
●トマス・グドウィン

一方、民衆の側にも、これに呼応する条件が熟しており、一六四〇年の経済的危機と社会的不安の深化は、当時の議会への請願がそれをよく物語っている。そこでは「取引の全般的な死滅」と「極端な困窮」に伴う「悲しい不満や絶望的な決意」と「危険な思想や意見」が表明され、「われわれのはなはだし、避けることのできない窮乏が、ある暴力的な結果を生み出すであろう」と訴えている。このような状況は、民衆のあいだに千年王国への期待をつのらせたばかりでなく、千年王国

思想は神学者や聖職者の手から民衆の手へもうけつがれ、独自の展開を開始するようになる。いまや霊感を受けた無学な民衆が「仕事台から説教壇への跳躍」を行ない、彼らの仲間が説教はじめた。

Ⅱ セクト型千年王国思想

こうしてはじまった、既存の教会組織に反抗する、セクトの民衆運動のなかに千年王国思想について、内戦の開始される一六四二年のあるパンフレットは、すでにつぎのように指摘している。「千年王国論者はわれわれのあいだに多数おり、彼らはキリストの地上の王国を待望し、それがすぐにもはじまって、千年間続くに違いないと信じている。われわれのあいだで黙示録的信仰をもつひとびとの大多数はこのような意見であって、現在よりは将来の出来事のように研究することが多く、戒律よりも予言によって支配されている。この幻想は国家にとってもっとも危険である。というのも、神を恐れぬひとびとは殺されなければならない……と、彼らは教えているからである」。したがって、このような思想は「宗教の癌であり、国家の壊疽である」と結論されている。

このようなセクト型の千年王国思想にたいする危険視は、内戦の進展が議会軍の優勢に転換するとともに、革命陣営内部の分裂が表面化した一六四五年ごろからいよいよ強まってくる。同年の『異端全書』は、千年王国論を「現在よくある異端」とし、「この教説は、ひとびと

の心を、火と剣のみを吐くような狂暴で不自然な熱望で満たし、ミユンスターのアナバプティストのような眼で同胞を眺めるように彼らを仕向ける」と警告し、翌年、ビュリタン右派の長老派に属するエドワーズは、「キリストが地上に再来し、千年間にわたり、この眼で見える地上の王国として、外的な栄光と華麗のうちに、全世界を統治して、すべての王国と帝国を打倒する」と主張する「彼らの意図は、すべてのものを転覆し、全面的な変革を行なうことである。……昔のアナバプティストたちよりも、わが国の多くのセクトたちほど、人間社会にたいして、政治的・宗教的・経済的なあらゆる種類の統治機構にたいして、一初め信仰にたいして破壊的な原理を主張したことはない」と力説している。翌四七年の『もつとも危険で忌まわしい教説の発見』も「キリストは、合法的であろうとなかろうと、すべての政府を破壊するであろう。……天国はすべて、この地上に存在する。……選ばれなかった多数のひとびとも救われるであろう」と報告している。

ところで、このようにセクト型千年王国思想を「危険で忌まわしい教説」と考えるのは、カルヴァンの選民思想に立つビュリタンの主流であり、当時、議会の多数を占めていた長老派にその主要な担い手を見出した。そこで、次第に議会との対立を意識してきた民衆のセクトのあいだに、「貴族がキリストの敵である」という批判からさらに進んで、「長老派がキリストの敵である」という声が聞かれるようになる。民衆を国王派と闘う戦力

●『異端全書』（一六四五年）

●『もつとも危険で忌まわしい教説の発見』（一六四七年）

●「千年王国論の意図はすべてのものを転覆し、全面的な変革を行うことである」（エドワーズ）

とみなして呼びかけた聖職者にかわって、彼ら自身のなかから、民衆こそ千年王国の担い手であると説く指導者が現われるようになる。ディガーズと呼ばれる貧農の運動の指導者ジェラード・ウィンスタンリがそれであり、彼の描く理想社会像のなかに、アナキズムの豊かな芽ばえを発見することができる。

一六四九年一月の国王処刑、三月の王政廃止、五月の共和国宣言という一連の事件は、「旧世界が火中の紙のように燃えあがりつつある」ことをウィンスタンリに意識させ、千年王国の切迫を確信させるものであった。

「おお、喜び祝え、主なる全能の神が地上を統治するときがはじまりつつある。……彼は殺人的な権力を打倒し、それを足台にするであろう」と彼は語り、「土ほこりと思われ、足下に踏みつけられている最下層の軽蔑されていひとびとに、また彼らから、正義の法は、最初に現われるであろう」と民衆に訴えている。

そしてセクトの立場から、既存の教会組織が国家権力と合体しつつ民衆を抑圧するメカニズムが、つぎのように分析される。「交替すること、盗奪された権力の保持者たちは、教会の仕事を維持、運営するために、神に頼らないで、依然として国王や議会に請願を続け、宗教的権力を確立して、ひとびとに信仰の劃一性を強制した。だが、利己心と現世のくらしが彼らの熱心さの底に潜んでいた。……この宗教的権力がうごちたてられてから、それは……庶民を高等法院や裁判所で悩ますものとなつていく。しかも、「もしも、盗みのできない、貧し

い隷従させられている男が、その束縛に苦しみ、もつとも多く働くわれわれが、地上の楽しみをもつとも少くしか得ていないのに、少しも働かない連中がすべてのものを享受している、とでもいえば……十分の一税を貰っている牧師が、すぐさまびしやりと不満の口を封じて、この貧しい男に、貧しいひとびとは何物も享有してはいないが、彼らのもつべきものは、心の内なる満足のために、神の御心によって与えられているものなのだ、といつて聞かせる」のである。

このような経済的権力と宗教的権力との関連についての指摘に続いて、ウィンスタンリは、経済的権力と政治的権力との結合を批判して、「土地が自分のものと主張し、この個々別々の財産を我のものの汝のものと主張するような者が支配者であるかぎり、庶民が自分たちの自由をもつことは決してないだろうし、土地が紛争や抑圧や不満から解放されることも決してないだろう」と述べ、さらに、ひろく人間関係一般における権力の存在を、つぎのように告発している。「権力を手にいれた者は誰でも他人を専制支配する。現世の欲望を求めて生活する多くの夫、両親、主人および為政者は、彼らの妻、子供、召使い、臣下たちが自分の仲間であり、自由の恩恵の分け前にあずかる平等の特権をもつことを知らないで、支配下に置かれた彼らにたいして、抑圧的な領主のように振舞う」。

では、こうした権力的抑圧はいかにして消滅するのか。「この私有財産権こそ、人間がそのもとでうめき苦

●「旧世界が火中の紙のように燃えあがりつつある」（ウィンスタンリ）



ディガーズのパンフレット

しんでいる呪いであり、重荷である」とすれば、解決の方向は明らかであろう。「原始のように、土地が共同の宝庫となつて、正義の王が各人の心を支配するにいたつたとき、彼は最初のアダムを殺す。というのは、これによつて貪欲が殺されるからである。人間は自己の自由な労働で衣食をうるであらうし、そうなければ地上でそのうえ何を望むことができようか。高慢と羨望も同じようにこれによつて殺される。というのは、各人はお互いに平等な被造物と見なすようになるからである。各人は、じつに、完全な自由人になるのである。こうなれば、「差別は消滅して、正義の王が各人の心のうちに、そしてまた全被造物のうちに宿り、万物は甘美にそして平静に彼に従ひ、彼もまた甘美で静かに彼らを統治する。これこそが、栄光を賛えられているかのシオンの都である」。ここには、アナキズムが理想とするような、一切の権力の支配と差別とが存在せず、自由で平等な個人の、平和な生活が、千年王国として描かれている。しかも、この理想社会は、この地上に実現されるのであつて、来世における救済のみを説く僧侶に向かつて、ウィンスタンリはつぎのように攻撃している。「肉体が塵に埋もれるまでは、この神の栄光は判らないものだと言へることによつて、もはや人民を欺いてはならない。この偉大な不思議は現われはじめている。それは肉体の眼で見なければならぬ。そして人間の五感がこの神の栄光に参加するのである」。

Ⅲ 千年王国への二つの道

ウィンスタンリは、「正義の王」としての神の「偉大な不思議」により、この地上に千年王国が実現すると語っているが、彼によれば「神は天上に住んでいるといわれるが、それは万物の生命と平和であるスピリットなのであり、理性なのである」。そして「神を自己の外部に求め、遠い彼方に神を礼拝するものは、何を礼拝しているかを知らず、自分自身の心の想像力によつて迷わされ、欺かれる。……しかるに、神を自己の内部に求め、内部に輝く正義のスピリットに従ふものは、彼が何を礼拝しているかを知る」のであるとすれば、「正義の王が各人の心に宿る」ことによつて実現する千年王国は、神のスピリットの働きによるものといえる。理想社会の実現は「神が王国の権力者たちの心のなかにはいり込み、彼らの権力を欺から取り戻す」ことによるのであつて、武装蜂起は否定される。

この点は、イギリス革命の激動のなかから貧しい民衆のセクトとして誕生したクエーカーの場合も同様である。彼らも「聖徒がこの世を統治するであらう」という偉大な真理」を認めながらも、「肉の武器」(武力行使)は「暴力的で不合理な仕方」であるとして否定し、神の「内なる光」の輝きに期待し、主のスピリットの働きに待つ。「キリストの王国の建設は……現世の政略や知恵、あるいは肉の武器によつて押し進められてはならない」のである。武力を行使し、「たとえ諸君が全力をあげて

自由のために奮闘しても、より強大な力が対抗し、この闘いによつて諸君は何を獲得するだらうか」と主張され、「自らの知恵と理性にとらわれているすべてのひとびとよ、沈黙して神を待て」と、その指導者フォックスは呼びかけている。

このように沈黙して「働き」を待つフォックスは、つぎのような期待と確信に支えられていた。「国民を欺く貪欲で高慢な僧侶たちよ、……諸君の破壊は到来しつつある。……この世の強大にして富裕なひとびとよ、泣き叫べ。最後の日のために財宝を蓄積した諸君の悲惨が到来しつつあるから。諸君の金銀は錆や潰瘍のように諸君を腐蝕してゆくであらう。火はともされた。主の裁きの日は現われつつある」。こうして権力の座にあるひとびとが打倒されたのち、この社会には一切の強制や束縛が消滅し、自由な個人が「内なる光」を唯一の導きとして行動することになる。「……これが新しいイェルサレムである。行動の基準となるいかなる外的な法も必要ではなくなり、主が各人の心の紙に書きつけた内なる正義の法と主だけが、彼の民に教える唯一の支配者となるであらう」と、クエーカーの指導的な一人ベン・ニコルソンが語っている。内なるスピリットは、「古いものを消滅させ、万物を一新せよ。現在の世界の姿を外面と内面の双方ともに消滅させ、両面の新しい姿を生ぜしめよ」と告げるのである。

ところで、ここで注意すべきことは、外的な権力の支配を否定することは、日常的な自己の否定を前提として

いることであり、「自らの知恵と理性」の「沈黙」によつてのみ、主の「働き」がはじまるのであつて、こうした自己否定を通して、「内なる正義の法」の支配する新たな地平が拓かれるのである。そして、このように日常性に埋没した自己を否定する原理が、クエーカーの教義の核心となる「内なる光」であり、「この内なる光」という思想は、トルストイの思想と類似し、内在する正義についてのいくつかのアナキスト的概念から遠いものではない(ウドロック)といわれているが、フォックスは、それを感じとった神秘的な原体験をつぎのように語っている。「いまわたくしの心は、燃えあがる剣をうけて、神の樂園に招き入れられた。すべてのものは新しく、またすべての被造物は、言葉にいつくせないような香りを放っていた。……創造がわたくしに開示された。そしてすべてのものが、その本質と徳性に示された。その名称を与えられる様子がわたくしに示された」。

このような「内なる光」に導かれることなく、ただ既成の権威と権力をもつ教会組織に安住し、日常性に埋没した怠惰な僧侶にたいし、フォックスは、つぎのように激しく弾劾する。「わたくしが、教会へひとびとを呼び集めるために鐘の鳴るのを聞いたとき、わたくしの生命は衝撃をうけた。というのは、それはちょうど牧師が彼の商品を売ろうとしてひとびとを呼び集めるために市場の鐘を鳴らしたようだったからである。最上位の司教から最下位の牧師にいたるまで、彼らの説教、つまり聖書の切り売りによつて、いかに莫大な額の貨幣が得られて

●各人はじつに完全な自由になる

●ディガーズもクエーカーも「肉の武器」を否定する

●自己否定を通して「内なる正義の法」の支配が拓かれる

●フォックスの神秘的な原体験



独占商人の風刺画

いることだろう。そしてこの反権力の姿勢を支えたものは「内なる光」にたいする確信であった。「これらること」「救いの現われ」を、わたくしは、ひとの助けや文字によって知ったのではなくて、……主イエス・キリストの光で、また彼の直接のスピリットと力によって知ったのである」と、フォックスは語っている。

このようにして、クエーカーやウィンスタンの場合に、各人の心の内部に輝く神のスピリットの働きにより千年王国が実現されると考えられ、人間の「外的武器」の行使が否定されるのたしい、聖徒の武力行使による現権力の転覆が千年王国実現を促進すると考えるのが、第五王国派である。

すでにみたトマス・グドウィンの『シオンの栄光のひらめき』（一六四一年）において、「キリストが現われて王国を手に収めるとき、ヨハネ黙示録第十九章では、血に染まった衣をまとっている」と記されている。……キリストはあらゆる敵と闘ってそれを駆逐し、聖徒たちは軍服をまとって凱歌をあげながら出現する」と述べられていたが、この独立派ビュリタンが反国王闘争の戦力として訴えた民衆は、一六四九年の国王処刑により共和国権力の座についたこのグループにたいし、こんどは武装蜂起を含む実力行使により闘いを挑むことになった。四九年を境にして、ビュリタン主流から千年王国思想が急速に影をひそめてくるが、それは、長老派のような保守的グループにとって、国王処刑は人新しいイェルサレムVを予告するものではなくて、アナバプティストの蜂

起を連想する人新しいミユンスターVの前ぶれと思われるたし、支配の座についた独立派にとって、もはやそれ以上の変革は危険なものと考えられたからであろう。千年王国思想の本質が「この世界の完全で根底的な変革への希望」（ホプズボーン）であるとすれば、それは当然の帰結であり、一六五〇年代は、セクト型千年王国思想が政治過程の表面で活躍することになる。

すでに四九年二月、第五王国派の最初の組織化を示す『請願による質問簡条』が軍会議に提出されたが、そこでは、「あらゆる現世の支配と権威とは（その現世の制度にかんする）かぎり」たとえクリスチャンの手中にあるうとも、打ち倒されなければならない」と主張されている。

ついで一六五一年のウースターにおける反革命の鎮圧に続く共和制の危機と五三年の長期議会解散・指命議会の成立にいたる政治史の展開において、ハリスンを中心とするこの党派がかなりの積極的な影響力を発揮したが、「千年王国への輝かしい序曲」を幻想させた指命議会が解散され、クロムウェルがプロテクターに就任して軍事独裁体制を確立するようになると、「その破壊的傾向によって、プロテクター政権の性格と行動基準を本質的に規定した、この独裁期間の一要素」（レンツ）として、その武装蜂起路線が注目を集めたわけである。

この派の反権力思想を代表するジョン・ロジャーズによれば、権力の支配・抑圧機構の担い手は僧侶と法律家であり、「底知れぬ煙から立ちのぼってきたこの国の二大悪疫が僧侶と法律家であり、彼らはともに腐敗した、

肉の、キリストの敵の利益を維持している」。そして「ノルマン・コンクエスト以来、法律というものは、今日にいたるまでノルマンの束縛であり、自由人の首につけられた鉄のくびきやカラーであった」から、その徹底的な改革が要求される。そのさい「現行法のある部分を改正し、したがって、瓦解すべき第四王国の原則に従って改革するのでは不十分である」と彼は注意する。つまり、ここでは「第四王国」（現体制）とはまったく異質の「第五王国」（神の王国）の原理による、社会の完全で根底的な変革が問題とされているのであり、千年王国思想が現体制にたいする全面否定の論理を明示していることが、ここにはっきりと示されているであろう。

IV セクト型民衆運動の分裂と挫折

第五王国派の武装蜂起路線は、当然のことながらプロテクター権力の側からすると、民衆運動弾圧政策を誘導し、一六五五年二月、「集会や会合における僧侶とその他のキリスト者の騒乱を禁止する布告」が発せられる。翌五六年三月の蜂起計画は事前に情報をキャッチした当局により阻止され、プロテクター暗殺の陰謀を知った彼は、一六〇名のボディ・ガードにより身辺を固め、その整備された情報網は共和主義者と提携した七月の蜂起決定も察知し、指導者を逮捕した。こうした弾圧の強化は組織に動揺をきたし、「政府にたいする忠実な友人」たるべきであると主張するグループと、破壊の仕事がキリストの王国に先行し、聖徒の当面の任務はその仕事を準

備すべきであると主張するグループとに分裂する。後者の計画した五七年四月の蜂起は不発に終わり、これ以後、いよいよ孤立・尖鋭化した第五王国派は、五八八年にも蜂起をはかったが失敗し、指導者を逮捕された。

一方、第五王国派の転向分子を吸収したクエーカーは、武装蜂起には反対しつつも、「われわれのあいだでは法律が変えられなければならない、政府と秩序が変えられなければならない。不正と抑圧が除去され、貧しいひとびとの首からすべてのくびきと重圧が取り払われるべきである」と主張し、五一年から五六年までに二千名近い投獄者を出すような、果敢な反権力の運動を展開した。だが、組織の拡大による「内なる党」の稀薄化を恐れ、スピリットの働きを離れた他のセクトとの連帯を警戒する彼らは、諸セクトの中核となって反権力闘争を組織化しようとはせず、逆に他のセクトと自己とを区別し、他の諸セクトに「心の内なるキリストの敵」を見出す方向に傾いた。クエーカーの意図は水平化運動であるとは非難されると、「ある水平化の意図は遂行すると疑われているが、それは誤りであり、われわれにはまったくそんな意図はない」と弁明して、水平派の残党との無関係を主張し、「クエーカー」というのは恐るべき潰神から他方の極端な禁欲生活に転じたランターにほかならず、彼らの教説はランターとほとんど同一であった」と指摘されると、「現在新たにキリストの光と十字架の生命に抵抗しているのは、ランターの老朽化したスピリットである」と攻撃してランターとの一線を劃す。さらにア

●聖徒の武力行使による現権力の転覆が千年王国実現を促進する

●「内なる党」の稀薄化を恐れ、他のセクトとの連帯を警戒するクエーカー

ナバブティストにたいしては「諸君は数を増し、政略や力によって自分たちの利益や栄誉を強めたが、獣の力に屈服したのである」と非難し、第五王国派にたいしては、「怒りとともにキリストは現われ、諸君の天国に天罰を加えて陶器のように粉碎するであろう」と攻撃している。

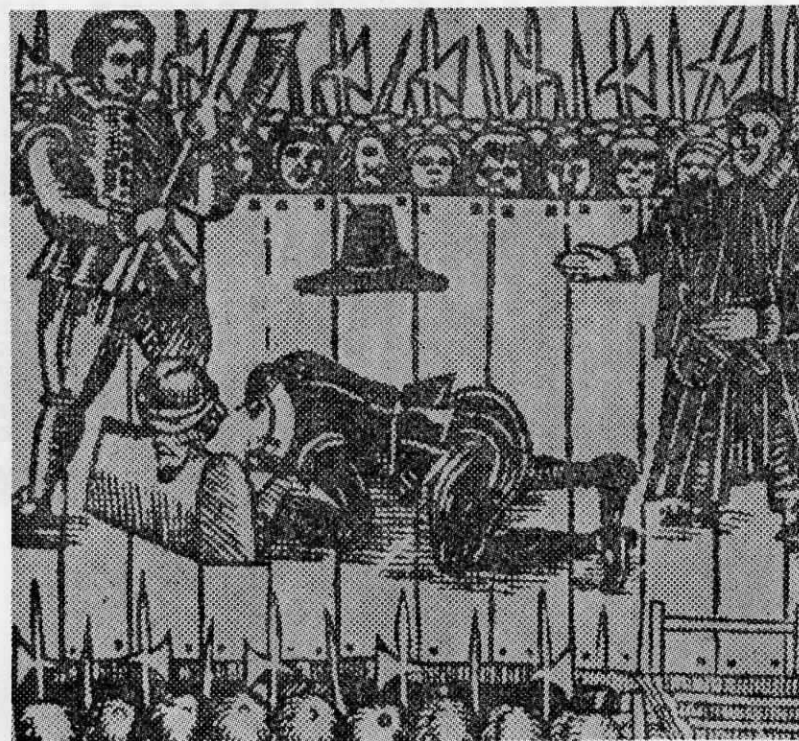
こうしたセクト間の分裂と対立のうちに、一六五八年九月、クロムウェルの病死によりプロテクターによるこの独裁体制は以後数カ月のうちに崩壊し、一六五九年の危機を迎えると、「共和制時代のクエーカー主義の明白な特徴であった、千年王国論的な社会的急進主義の最後の大爆発」(マクリア)が起ころ。たとえば、すでに五月中旬、ベニントンは、「よき古き大義を復活したかのスピリットを、軍隊と国民のなかに喚起するよう心掛けよ」と呼び掛け、「主の偉大な力が働きはじめています」と警告している。だが、この危機の時期にはまた、クエーカーの内部において、現実政治とのかかりをめぐって、これまでの一時しのぎの妥協の弱みが露呈し、対抗的な意見が表面化し、動揺する。一部のグループは、五九年一月二日になって、他の諸セクトへ統一戦線結成のアピールを発表し、「われわれは真理と誠意から生ずるいかなる善の現われにも友好的であり、誰に正義が現われようと、われわれはそれに参加する用意がある」と宣言したが、すでに時機を失していた。

翌一六六〇年四月二三日、クエーカーのジョージ・ビショップは、友人への手紙で、「主の裁きの日を遠くに

考えるひとびとについては、その日が知らぬ間に彼らのうえにやっつこないように注意させよ」と警告し、「地上の王国は主と彼のキリストのものとなり、神はこの地上で知られ、その栄光を賛えられる。そして古い悪魔や偽囃者は地獄へ投げ込まれる」ことを確信しており、五月二日づけの手紙では、「抑圧者の怒りを怖れて、真理を隠さないように注意せよ」と忠告している。だが、数日後の五月八日に議会は王制復古を宣言し、亡命先のオランダからチャールズ二世が一九日にロンドンに到着し、王政復古が行なわれると、初期クエーカーの戦闘的な態度に変化が現われる。

六月九日に出版されたパンフレットでは、「この現世の王国が主とキリストの王国になるであらうし、そのことについて、われわれは真理のスピリットに確信をもっている」と語りながらも、「われわれの正しい政府と統治者を支持する方法は、統治者とその命令にすべて合法的な服従をすることである」と主張している。そして、五九年の危機にさいして、権力の座にあるひとびとが「鉄のくびきを、かつて彼らと一緒に苦しみ、平等と自由のためにともに闘った、彼らの同胞の首にかける準備をしている」と激しく攻撃したビショップも、クエーカーたちが「どここの国にしようとも、静かで平和なひとびとであり、すべての正しい命令には忠実に服従するものである」ことを表明するようになる。

一方、第五王国派は、五七年以来獄中にあった指導者ヴェナー、メドリ、マーティンらが五九年三月に釈放さ



▶チャールズ二世の処刑

●第五王国派の最後はかない武装蜂起

●クエーカーの八静寂主義義への転向

れ、その活動が活発化するが、プロテクター体制にかわるべき政治形態の具体案については内部の意見が分裂し、六月になると反対勢力からの悪意に満ちた中傷的な噂が流布され、クエーカーの統一戦線への呼びかけのあったところには、「絶望的な分裂状態にあった」(カッツ)。そして、王政復古の実現により、深い挫折感を味わったその指導者たちは、ロジャーズやキャンのように国外へ逃がれるか、フィークのように田舎へ身を隠すかしたが、いよいよ孤立化したヴェナーのグループは、第五王国派の最初にして最後のはかない武装蜂起を決行した。一六六一年一月六日、『希望の戸口』と題する宣言文を用意して、ロンドンのコルマン・ストリートの集会所を出発した数十名の第五王国派は、国王反対を叫びながらセント・ポール寺院まで進んだが、一度セント・ジョンの森へ隠れ、九日ふたたび市内へ侵入した。軍隊との交戦で二〇名ほどの兵士を殺したが、彼らも二十数名の死者を出し、約二〇名の逮捕者を出して鎮圧されてしまった。こうして、彼らの運動は、「見せかけの宗教的口実を設けて、不法な時と所においてしばしば集会や会合を催す、わが合法的権威と政府にたいする公然の敵、クエーカー、アナバプティストおよび第五王国派」の集会を禁止するという布告を残して、敗退し、すでにみたクエーカーの八静寂主義への転向とともに、アナキズムの原初形態を含むセクト型民衆運動は挫折したのである。